

「分かちあい」の起原：ヒトとヒト以外の霊長類における共存の諸相
第8回研究会報告

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容はそれぞれ著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時：2025 年 5 月 10 日（土）13:30～18:30

場所：AA 研 304 室

報告者：西川真理（人間環境大学）

山極壽一（総合地球環境学研究所）

参加者：13 名（オブザーバー参加者 3 名）

3. 内容（発表要旨および主な議論）

3-1 ニホンザルのコドモの移入事例から考える分かちあい（西川真理）

【要旨】

本発表では、屋久島におけるニホンザルの移入事例を取り上げ、群れのメンバーと移入個体の間でみられた社会的交渉を「分かちあい」として捉えることで、ニホンザルの社会的柔軟性と共存のメカニズムについて検討する。

ニホンザルは 10～50 頭程度で群れをつくって生活している。1 つの群れは、複数のオトナのオス、複数のオトナのメス、およびそのコドモで構成されている。メスは生まれた群れで生涯を過ごす一方で、オスは 3.5～10 歳（平均 5.3 歳）で出自群から別の群れへ移籍し、その後も数年ごとに移籍を繰り返す。したがって、群れは血縁で結ばれたメスとそのコドモたち、および血縁のないオスたちが一緒に生活している。

ニホンザルの群れのメンバーシップは、個体の生死やオスの移出入を除けば安定しているが、群れの分裂と融合が生じることが知られている。屋久島に生息するニホンザルでは、群れの個体数がおおよそ 50 頭を超えると群れの分裂が生じる。一方、群れの融合も稀に生じる。これまでに報告された事例では、群れのメンバーが徐々に減少し、最終的にオトナメス 1 頭（とその子ども）のみになると隣接群へ移入したことをもって、群れの融合が生じたと捉えられている。

鹿児島県屋久島に生息するニホンザルの E 群は、2004 年から継続的に調査がおこなわれており、2015 年 2 月に複数のコドモのオスとワカモノのメスが E 群に移入した事例が確認された。移入コドモオスのうち 2 頭は、その身体的特徴から E 群の北側を行動圏とする隣接群の出身だと考えられた。移入コドモオスの推定年齢は 2～3 歳であ

り、オスの移籍が可能となる年齢よりも若いため、通常の移籍とは異なる。さらに、移入個体の中にワカモノメスが含まれていたことから、群れの融合が生じたと考えられた。

移入個体と既存メンバーとの間には以下の社会的交渉が観察された。いずれの社会的交渉も通常は同じ群れのメンバー間で見られるものである。

1. 社会的毛づくろい

社会的毛づくろいは、通常2個体間でおこなわれる親和的な行動である。毛づくろいをする/されるという役割を交代しながら交渉を繰り返すことで、個体間に親和的な関係が構築・維持される。移入個体とE群のオトナメスやオトナオスとの間で双方向的な毛づくろいが観察されたことから、親和的關係が構築され、毛づくろい相手の分かちあいが生じていると考えられた。

2. ハドリング（サル団子）

ハドリングとは、複数の個体が密着して集まることで寒さをしのぐ行動である。観察された移入個体がE群のメンバーとともにハドリングをおこなっていたことから、移入個体はE群に社会的に受け入れられ、近接を許容された存在であった。また、このハドリングを通じて、E群のメンバーと移入個体の間で体温の分かちあいがおきていると解釈できる。

3. 伴食

伴食とは同じ採食パッチ内で複数の個体がともに採食することである。伴食をおこなうと採食パッチ内で食物を巡る競合が生じる。そのため、群れのメンバーでも伴食を避ける傾向がある。移入個体とE群メンバーとの伴食が観察されたことから、移入個体は採食パッチ内に共在することが許容され、食物資源の間接的な分かちあいがおこなわれていた。

4. 遊び

移入コドモオスとE群のコドモやワカオスが遊ぶ様子が観察された。その際、攻撃的行動は見られなかった。親和的社会的交渉の相手を分かちあっていると考えられた。

ニホンザルの群れ間の関係は敵対的であり、異なる群れのメンバー間、特にメス間において親和的交渉や伴食がおこることはない。2014年9月の調査では、E群の中に移入個体は確認されていなかった。本観察事例では、上述したように通常は群れのメンバー間で生じる行動が確認されたこと、そして、E群の個体による移入個体を排除しようとする攻撃や威嚇などの敵対的交渉が確認されなかったことから、2015年2月の時点で移入が生じてからしばらく時間が経っていたと考えられる。

移入個体の出自群の行動圏は E 群の北側にあり、この地域には有害鳥獣駆除の目的によるくくり罠や箱罠が設置されている。このことから推測されるのは、移入個体の出自群のオトナ個体がすべて捕獲され、残されたコドモやワカモノが隣接する E 群に移入した可能性である。コドモやメスにとって、群れにオトナがいない状況は隣接群との競合に不利になるため、隣接する群れに移入する選択がとられたと考えられる。移入が生じた当初の状況は観察できなかったため融合のプロセスは不明であるが、親和的な社会交渉による「分かちあい」の積み重ねによって、群れの融合が達成されたと考えられる。また、ニホンザルの群れは、複数の家系で構成されていると考えられている。本観察事例では移入個体の中にメスが含まれていたことから、群れの家系が増える要因のひとつとして、他群からの移入メスが新たな家系の創始者になる可能性が示唆された。

【主な議論】

●群れの融合と土地利用

・コドモたちはもともとその場所にて、その場所に E 群がやってきて融合が起きたととらえたほうがよいのではないか。コドモたちが動いて E 群に移入し、融合したというのでは違うのではないか。

・別の例（高畑由起夫さんの観察事例）では、群れが小さくなって母と娘が残ったとき、行動域が非常に狭くなってゆき、そこに別の群れがやってきてその母子が群れに入ったという例がある。母子が積極的に群れに「入った（移入した）」というより「吸収された」といった感じだと思う。

・「移出入」という言葉はメンバーに引きつけられた言葉だが、その一方で土地利用という側面も考えた方がよい。両者は同じ現象を別の次元でとらえたものといえるが、この二つは同時に見てゆくべきだろう。土地利用とは端的に言えばそこで「食べてゆけるか」という採食に関わる問題でもある。

・「移入」には土地と結びついてその土地を利用することになる「空間的移入」と、その土地において別の群れの一員となる「社会的移入」とがある、と分けて考えるべきではないか。

●群れ同士のエンカウンターや群れに移入してくる個体に対して起きることの具体的なあり方に関し、それは必ずしも敵対的ではないのか？

・当該の群れ同士の力関係によることが大きい。出会えば必ず敵対的になる群れの組み合わせもあれば、拮抗的な組み合わせもある。加えてずっと同じ関係（敵対的とか拮抗的と

か)であるわけではなく、状況によって、年によって、とりわけメンバーの数によって変わってくる。

- ・群れ間に明らかな優劣（大小）の差がある場合（個体数とか大人の数とか）、小さい方の群れが気配を察知して引き返す（エンカウンターを避ける）。敵対的な行動にも強弱があり、稀に非常にしつこく怪我をさせるまで追い詰めて攻撃することもあるが、そうして激しい攻撃は交尾期に多いなど、時期によっても攻撃の度合いは異なる。今回紹介したのはすべて非交尾期の事例である。

- ・移入個体に関しては、乗っ取りを狙って入ってこようとするオトナオスもいて、これに対しては群れ内のオスが排除しようとして敵対的になるが、一方で5-6歳の若いオスに関しては遠目に見て、攻撃はしないし、グルーミングや遊びといった親和的な行動も見られるため、「相手次第」という側面もある。

- ・メスに関していえば、ふだんつき合っている相手ではないということはわかっているが、だからといって排除すべきものだということまでは行っていないという状況もあると思われる。

●移入個体がコドモ（3-4歳）だったことに起因する現象だとはいえないか。

- ・金華山では群れ同士が出会ったときに、コドモは両群の個体が混ざっていっしょに遊ぶし、相手の群れのメスに近づいても怒られない（無視される）ことが多い。

- ・交尾期に群れにオトナオスが近づいてくるのは繁殖を求めてきているのでそもそも敵対的になるのに対し、本事例は非交尾期に2-3歳の繁殖上はまったく競合相手にならない個体がうろうろしているだけなので「まあいいか」といった感じだったのではないか。したがって、「移入」といっても両者の意味合いはまったく異なるといえる。

- ・性成熟に達する前の個体は身体的にも性差がはっきりしていないため、オスでもメスでもない無性的な存在であり、それが群れへの移入が受け入れられる（許容される）要因となっているのかもしれない。

●用語の問題

- ・「移入」「移出」「融合」等の用語はわれわれ（人間）の社会的定義に依存する。行動学的なローデータレベルにこれらの用語をあてはめる際には、相応の注意が必要だろうし、逆にこうした用語自体を問わなければならないかもしれない（先の空間的移入と社会的移入を分けて考える、という話に通じる）。

- ・「群れ」という用語についても同様で、「群れ」って本当にあるんだ、と思う場面の方が頻度的には多いけれど、それで「エンカウンター」という用語も生まれるわけだけれど、

「群れ」の定義に合わない状況もちらほらある。それが本報告なので、それをどう分析するのは難しい。「移入」も「移出」も「融合」も群れを前提とした用語である。ニホンザル研究では「群れ」という大前提があるので、平気でそれらの用語を使うけれど、行動学的なローデータに照らしたときに、社会的な前提に則った用語は分析において問題が起きてくるのではないか。

- ・社会的用語を否定するわけではないが、「移入」というのと土地利用は分けなければと、やはり思う。たとえば国と国の境界線があって、そこでいざこざやっているときに、侵略として入り込んだときに、融和政策をとるのか、移民排除するのかということと同様なことを見ているように思える。

- ・「空間的融合」と「社会的融合」という二つのレベルを分けましょうという話だと思う。ニホンザルには「群れ」があるということを、いちおうみんな信じているわけなのだが、この事例は「群れ」という概念が通用しない場面が現れた、という、むしろ群れ概念にとっては面白い問題である。

- ・一種の混乱期といってよいかもしれない。1970年代の箱根でもメスの移籍が観察されることが頻発して議論になったこともある。この時のメスの移籍は、複数の群れが（空間的に）ぶつかり合って重複した遊動域の中で起きた事件だったから、やはりこれは混乱期だといえるだろう。それを生態的にどのようにとらえるのかが重要だろう。群れがリジッتنا存在としてあり、社会的に移籍というメスのアイデンティティが変わったととらえるのかについても、難しいところがある。

●「群れ」の存在論と群れへのアイデンティティ（帰属意識）

- ・屋久島では異なる群れのメス同士は決してグルーミングはしあわないと、この事例を見るまでは思っていた。ニホンザルのメスにとっては言語道断のとんでもないことだと考えていた。

- ・ニホンザルたち自身が「群れ」概念をどのようにして構築しているのか、われわれ（人間）にはわからないけれど、ここを問わなければならないのだろう。人間社会の「国境」の問題にも関わるから社会科学系の方が議論に加わってくれと面白い。世界中で起きている違法移民をはじめとする移民問題にも通じる。ニホンザルの場合は異なる群れが出会ったら喧嘩する場合と、「あれっ？グルーミングしているじゃないか」という場合もある。これではわれわれには区別がつかない。サル同士で、「これは違う人たち」と思うときと思わないときって、そうした状況をサルたちはどのように解決しているのかを問いたい。

- ・群れがどのような存在で、サルの個体たちがどのようにアイデンティティを感じているのか、構築しているのかというのは、観察者がそれをどう把握し、判断することができる

のかという、霊長類学においても根本的で重要な問題であり続けている、ということの証左だろう。

・群れのエンカウンターではオトナメスによる「前線」ができることが少なくない。これを観察すると「群れ」が間違いなく存在すると思ってしまう。なのに同じ場面で、見ているとオスが行ったり来たりしていたり、まだ所属がはっきりしていない個体が高みの見物で、どちらにつこうかみたいな態度だったりする。オスとメスで群れというものへの所属（帰属）観念＝アイデンティティが違う可能性があり、かつそれは時期によっても違う。特に屋久島では非交尾期には群れに属しているけれど、濃い引きになると群れを出て所属がはっきりしないオスが出てくる。時間的にも変わってくるし、トランジットの場合もあるし、行ったり来たるする個体も出てくる。

・メスにおいてすら、群れの分裂直後には、混ざっちゃってあっちに行ったりこっちに来たりするような個体が出てくる。そしてあるときからいっしょにいることにながなくなる。「分かちあい」をしなくなる。遊動域は重なっているから空間的には同じことだが、1年単位では同じ場所に棲んでいるが、1日単位で見ると同じところにはいない、というのが現実のかたちである。積極的に敵対するのはエンカウンターのとときくらいしか観察されず、要は「いっしょにいない」ということなのだと思う。

・アイデンティティには「(私たちという) 群れ」へのアイデンティティと「(空間的な) 土地」へのアイデンティティがある。後者に関しては、長い時間スパンで見ると、コア・エリアと遊動域があり、コア・エリアには他群を侵入させない傾向がある。それが群れと群れの力関係で空間的に移動してゆく。サルにとっての群れとしての認識と、この土地は自分たちのみたいな認識とが重なり合って、それが徐々に変化してゆく。

・群れ意識が何歳頃から獲得されてくるのかも気になる。小さなコドモは母親とのつながりが強い。小さなコドモだから群れ意識が弱くて融合が容易くて、少し大きくなると群れ意識が邪魔をして他群に入れないということもあったりするかもしれない。そのクリティカルな年齢がどのくらいなのか。こうしたことは人間でも母親から家族、そして親族、遊び仲間というように、同様のことが起きていると思われる。ニホンザルの場合は母親から家系、そして群れというところに行くのだろう。そのとき、群れの規模（大きさ）は重要なファクターであると思われる。

●現象を「分かちあい」としてみること

・事例考察の中で「毛づくろいの分かちあい」とか「暖（サルだんご）の分かちあい」とか「食物の分かちあい」などいくつか指摘されていたが、何であれ何かが分かち合えればそれが「群れ」というようなことも言えるのか。

・「行動圏を分かちあっている」、その分かちあっている土地が移動したので、そこを使っている個体も融和的になってしまった事例としてとらえられるのではないか。そういう例は初めて聞いた。

・「分かちあい」としてまとめる強引さのようなものが気になるのだが、何かを飛び越えて「分かちあい」に行ってしまうている。それはたぶん社会的な受容のような、メンバーとして受容するというような部分かと思う。個体レベルで見ると毛づくろいは誰とするかとか、サルだんごを作るときは誰と接触しているかということを観察してゆくと、ある種の偏りがあって、それが受容されてゆくときの一つのやり方ではないか。そのような形で丁寧にみてゆくことで、強引じゃなくみえてくるかもしれない。

●「北」へ動いた理由と「罨」、保護区と国立公園化、「混乱期」と生態的環境の変化

・なぜどの群れも「北」に動いたのか、そして動いたら個体数が減り、群れが消滅する。

E 群も北に動いて、個体数を減らした。「罨」という人為的な要因が効いているのか。

・北に移動するのは、南には多くの群れがひしめいており、北は密度が低くて移動が可能であるためだと思われる。北の密度が低いのは罨のためと考えられるし、南の密度が高いのは特別保護区になり、国立公園になり、そして世界遺産になったという経緯もある。狩猟が禁止され、個体数が減らなくなったため、サルの数もシカの数も増えている。現在では鹿が増えすぎて林床の植生が変わってしまうため、シカの数減らす試みを環境省あげて行っている。シカの駆除が儲けになり、それをなりわいにする人もでてきた。

・混乱期にはメスも移籍するということだが、たとえば人間社会で母系の狩猟採集社会で女性がいなくなるのはショッキングなことだが、それが混乱期であるということで片付けず、ニホンザルを取り巻く生態学的な環境、人間の介入を含む環境の変化や、気候変動などの影響は考えなくてもよいのか。土地利用の問題も指摘されたが、それで群れが動いたり、包摂したり、ときには略奪したり、親和的になったり、敵対的になったりする。これは資源が 2015 年頃にどのような状況にあったのかとか、寒すぎたのかとか、それでメンバーが組み替わったり、突然群れが来て併合しあったりすることについて、より広い意味での生態環境が影響している可能性も検討したらどうか。

・生態的環境は明らかにサルの密度とシカの密度が増えたことによって悪くなっているといつてよい。だから、サルの群れ同士の敵対関係や土地利用もずいぶん変わったと思う。

・群れの消滅も屋久島では普通にあることのようなのだが（たとえば 20 年以上家系が途切れず続いている群れはほぼない）、金華山では 40 年以上続けている個体数センサスによれば、今のところ群れの消滅は一度も観察されていない。30 年、40 年の家系図が続いて記録されている群れもある。

・本事例は特殊事例なので、そうではない普通の状態、状況というのがわからないと、特殊事例に観察されたことのなかに「分かちあい」を見るというのは無理があるように思われる。普通の状態・状況との差分を見ていかないと説得力に欠けて強引な論理構成に感じられてしまう。複数の家系が群れの中に存在することも、餌付け群なら分裂しないので複数家系がいるのは理解できるが、屋久島の場合、メスの移籍によるのか、他の理由があるのか、メスの移籍によるものであるということを一般化してよいものか、検討の余地はあるだろう。

3-2 分かち合いの進化と人間の未来（山極壽一）

【要旨】

分かち合いという社会現象を進化の観点から眺めると、資源や生活場所の「分け合い」から「分かち合い」へという方向性を認めることができる。霊長類の社会進化を論じた伊谷純一郎は、夜行性で単独生活をする原猿類から昼行性で群れ生活をする類人猿への社会進化の流れを説いた。オスもメスも単独でテリトリーを構える社会は生息域を「分け合っ」ている。オスとメスがペアでテリトリーを構える社会は雌雄で生息域を「分かち合い」ながら、他のペアとは「分け合う」。群れ社会は遊動域を広げる必要が生じてテリトリーとして排他的には防衛できなくなり、隣接群と遊動域が重複する場所では「分かち合っ」ていると言えるかもしれない。類人猿になるとオランウータンはオスもメスも単独でテリトリーを構え、チンパンジーは複雄複雌群でテリトリー的な遊動域を構え、ゴリラは単雄複雌群で隣接群と遊動域が完全に重複している。人類の祖先がどのような社会で暮らしていたかは不明であるが、現在の狩猟採集社会を基本に考えれば、おそらく複数の家族的な集団が集合し、ゴリラのようなテリトリーのない暮らしを送っていたのではないかと思われる。

伊谷は霊長類の群れ社会には、オナガザル科の個体間の優劣を基本とした格差社会と、ヒト科類人猿の平等志向の見られる社会へと二極化する傾向が見られることを指摘している。たしかに、ニホンザルのようなオナガザル科のサルには群れ内で生息域は「分かち合う」ものの、食物は分けない。類人猿は時折食物を「分け合い」、社会的遊びやけんかの仲裁行動に見られるように対等で平等な関係を「分かち合う」ように見える行為が散見される。また、私はコンゴ民主共和国のカフジ・ビエガ国立公園で、ゴリラとチンパンジーが遊動域や主食となる果実の種類を大幅に重複させて共存している状況を分析した。系統が近く、生理的にも似通っている両種が争いをせずに共存できているのは、補助食物を重複させずに「分け合い」、ゴリラは草食的、チンパンジーは果実食的な採食戦略を採用して、互いに出会いを避けていることによると結論付けた。

このような人間に近い霊長類の行動や社会から、人類の祖先が草原へと進出して以来、700 万年の進化史でどのように「分かち合う」社会を作り上げてきたかを推察してみた。

まず、人類の祖先が最初に採用した直立二足歩行は「弱みを強みに変える戦略」として、分かち合う精神を育てる効果をもたらした。この歩行様式は四足歩行に比べて速力も敏捷力も劣るし、足が把握能力を失って木に登る能力も減退した。これでは草原を闊歩する大型の肉食動物に対して無力である。にもかかわらず、人類の祖先が生き延びたのは欠点を上回る利点があったからである。従来から直立二足歩行が長距離を効率よく歩くのに適しており、自由になった手で食物を運んだという利点が指摘されている。おそらく、そういった特徴を駆使して屈強な者が遠くまで出かけて食料を探し、安全な場所に持ち帰って仲間に分配し、いっしょに食べたのだろう。類人猿は食物を分配するが運ばない。人類は運んだがゆえに、食物を「分け合う」のではなく、「分かち合う」ことができたのだ。安全な場所で待っている人は、遠くに行った仲間が自分の好きな食物を持ち帰ってくれるという期待を抱く。食物を探す人はそういった期待を抱いて待っている仲間がいることを心に描く。そこで、「見えないものを欲求する」という人類独特な精神が芽生え、食物が人と人をつなぐ役割を果たすようになった。その結果、共感力が発達し、社会力が強化された。

さらに、人類の「弱みを強みに変える戦略」は、脳が大きくなり始めた 200 万年前から顕著になった。直立二足歩行によって骨盤が皿状に変形し、脳の大きな子供を産めなくなった人類は生後に脳を大きくする方法に転じたのである。草原で暮らし始めた人類の祖先は、肉食動物の餌食になる動物と同じように、多産になって子どもの数を増やす必要が生じた。そのため離乳を前倒しにして出産間隔を縮めたが、脳の成長を優先したために身体の成長が遅い子どもをたくさん抱えるようになった。その結果、親だけでは育児が成り立たず、複数の家族が寄り集まって共同体をつくるようになったと考えられる。この家族と共同体の重層構造の社会は、今でも世界中の社会の基本である。この社会は共感力が原資となって「自己犠牲を払っても集団に尽くす」という精神が基になっている。そのおかげで、人類は集団を自由に出たり入ったりできるようになった。また、それまで「分け合っていた」資源を「分かち合う」ようになり、喜びや怒り、目標といった「分け合う」ことのできないものを「分かち合う」ようになったと考えられる。

しかし、1 万年前に食料生産が始まり、定住と所有が原則となる暮らしが基本となると、「分かち合う」精神が崩れ、財を蓄積して「分け合う」ことを目指す社会が形成されるようになった。産業革命以降の近代の市民社会は、所有を個人の基本的な権利としてきた。しかし、科学技術と自由主義経済はそれを発展させて格差を拡大し、自然環境を大規模に破壊する結果をもたらした。現代の情報通信革命は賢く情報技術を使うことでその傾

向を抑え、「第2のノマド時代」をもたらして再びシェアリングとコモンズを基本とする平等社会へもどる可能性を示しているように思う。

【主な議論】

●奴隷の発生と定住化

・奴隷の話のところですが、そのプロセスにもものすごく不思議なことだと改めて思ったのですが、人はそれぞれ自分で自分の生を生きるといったやり方があると思うんですけども、人に自分の生き方が決定されてしまって、逃れられない。自分のあり方が他者に決められる、というのが唐突に始まったのか、人類史的にどんな感じで始まったのか。

→メソポタミアの古代史を研究しているジェームス・スコットの話で代弁すると、メソポタミアは湿地帯で、なるべく広い範囲で小麦を生産できるよう努力してきたわけだけでも、その過程でいわゆる権威や権力ができていく。国の役割って食料を蓄積してそれを分け与えるというものだが、だんだんと数えられる穀物を作ろうとする。それを一箇所に集めて分け与える。これはまだ分け合いの時代である。そのためには労働が必要である。穀物は収穫期の予想ができる。だからどれだけの人数を投入すればどれだけの収穫が得られる。そこで労働力のかり集めをした、それが奴隷だった。戦争は領土を広げるために起こったのではなく、最初の戦争とは奴隷を作るためだと、とスコットは喝破している。だが、耐えられなくて逃げ出す奴隷が多かった。要するに、狩猟採集の方がいいんだと。アジアでも現代でも少数の市民は定住していない。定住していないということは、土地に縛り付けられないということで、権力に支配されないということに等しい。そういう人たちの生き方をもう一度見直すべきじゃないか、というのがスコットの本音でもあるし、そうなのかなと思ったところであるスコットが明言してるのはヨーロッパの城塞都市は城壁を作って人々を抱え込んでいる。あれは外からの侵入を防ぐためじゃなくて、中の人を逃がさないためだといっている。

・現在の狩猟採集民もマレーシアのオラン・アスリの例だが「すぐに逃げちゃう」らしい。嫌なことがあっても逃げちゃうし、政府が何かさせようとする森に逃げちゃって全然捕まらない。また病気が流行ったらやっぱり逃げて分散して、結果的に感染症が広がらないようにする。それは賢明なありかたで、病気は特に家畜も人間も密集しているところで起こるから。それを喝破したのは西田正規（2007年『定住革命』）。西田正規は人類史の中の定住革命を論じたが、彼の主張は「定住は（人を）逃げられなくしたんだ」と。これはまさに「支配」というものが同期しているということである。

●分業、宗教のはじまり

・奴隷については、自分のあり方が他者に決められるというのは「役割」に近いものがあるかなと思う。人が逃げて自分の力で自由に生きていくというか、自分で全てできれば逃げられるが、何か役割の中に閉じ込められるという感じはないか。いわば分業なのだが、分業がまずあって、その後に人の役割というのがある世界が出てきた。奴隷の誕生の前に分業がもうちょっと前からあるんだと思うが、どのくらい前だったのか。

・宗教についても、全員が同じように宗教をやったのか、あるいはシャーマン的な誰かが役割を担ってやったのか、そういったこ意味で役割分担が変わったのか。定住化する過程で狩猟採集をしながら定住していたとしても「あなたはやじりを作る人ね」のように分業をさせたのか、どんな感じなのだろうか。今日の話の中で分業というのを入れたらどうなるのが気になる。

・分業というのは分かち合いというよりも分け合い。ゆるい分業は起こっているかと思うが、はっきりとした分業は比較的最近までなかったのではないか。現在の狩猟採集民をみても、大体一人で何でもできる。弓矢も作れば食事も作れる、女も狩猟ができる。だから何かを特定の人に分業してもらい、役割を果たしてもらおうというのは、あえてあまりしなかったと思う。ただ、宗教については、確かに呪術師のような人はいるかもしれない。

・「ゆるい分業」とは、道具を作るなどある程度専門的に携わる人はいたかもしれないが、（工業社会の都市のように）それだけで生きていく、自分たちで食料を作らないで、それを財貨、あるいは物々交換でもってやる、それをなりわいにして暮らす人のこと。

・火を定常化させたのが、ある程度宗教的な話ではないかと考えている。火は80万年前に定常化した。火は、それまで霊長類が暮らしていた昼間の世界から、夜の世界、つまり闇の中に何者かというものを想像させるひとつのきっかけになったかもしれない。言葉が宗教を生み出したことは事実だとしても、それ以前に薬草を含めて火によるトリップ体験が人々の心を現実から遊離させて、何か違う力でまとめるということが起こったのではないか。その時代はまだはっきりとした分業は起こってないと思う。だから、明確な司祭とか祭りごとを司る権威っていうのが出てくるのはもっとずっとになるのではないか。

・はっきりとした分業はやはり産業革命後ではないか。荘園主たちが土地を自由に譲渡できるようになって、農奴を追い出し、農民たちが都市に移動して、そこで工業製品を作るようになった。そのようにして分担が当たり前の生活をするようになった。ただし、武器を作って戦闘に従事する戦士は特別な存在だったかもしれない。

・戦士というのは専業ではなく、たとえば牧畜社会においては年齢階梯制があって、若者であれば誰もが戦士であり、有事の際には戦いに参加するという意味ではいわゆる分業とは違う。専門の戦闘集団が生まれるのはかなり後になってから、時代が下がってか

ら起きたことと思われる。年齢階梯制の元では同じ年齢階梯に属していればみんな平等なので、専門の戦士というのは生まれていない。

・人に対する役割期待が生まれたのはいつ頃なのか。この人はこうあるべきだみたいなものはある時代が変わっていくだろうが、それがいつ出てきたのか。

→それはやはり四大文明、エジプト、メソポダニア、インダス、黄河という大きな文明の中心地が確立されるプロセスの中で分業が起こり、格差が生まれ、生まれつき格差を背負って暮らす人たちができてきたという時代の名残ではないか。それがあまりにもひどすぎたものだから、宗教ができたのではないか。宗教自体はもっと古くても、世界宗教は四大文明の後で生まれているだろう。

・世界宗教以前にも宗教はあっただろうが、宗教的な専門家の誕生とその専門家が社会的な威信を持つようになったことは結びついているだろう。

●フィクション

・それをもう少し遡って考えていくと、おそらくフィクションを信じる力だと思う。人間がフィクションに囚われるようになってきた。そういう意味ではやはり認知革命のあたりからであり、世界宗教は最近すぎる。法もあればリーガルフィクションであり、法主体だもまた皮膚に境界づけられたあなたの身体というものはあなたのものですよとか、責任能力があなたにあるんですよとか、完全に物語の上で出来上がってくることである。国民国家もそうですし、ベネディック・アンダーソンの「創造の共同体」も完全にフィクションであるといつてよいだろう。

・フィクションって、そもそも分かち合いを目的として生まれたのだろうか。フィクションの中に境界を設けられて、例えば「あいつらはああいう民族だ」とか「狼のように汚い奴ら」とか、それも一つのフィクションじであろう。フィクションによって境界が設けられ、別の性質を与え、それはまた民族的なアイデンティティを言葉によって作ることになる。それぞれの内部に置き換えれば、それは分かち合いなんだと言っていいのかもしれない。ただ具体的なものとして見えるものではないから、どう考えたらいいのか。

・国家の役割の基本は、税を徴収して、それぞれの利用目的に従って平等に分け与えることであろう。だから北海道から沖縄まで日本国民である以上、税をとられ、その代わりに国家から支給される何らかの恩恵はある。それで国というのが一応目に見える形で意識されている。でも北海道と沖縄の人とは出会わない。

・だから幻想なのではないか。ただ国家という定義によれば、まさに税によって成り立っている。だから都市国家が最初にできたのは税によってできたというのがジェームス・スコットの定義である。そう考えるとルソーも出てくるが、直接民主制に近くなっていくのだろうか。しかも、直接民主主義はいま、今オンラインで可能ともいえる。全てが投票

できるような国のあり方もはや可能になったと言うが、どうなのだろう。むしろ SNS で乱れてしまっているようにも思える。

・フィクションが道具として使われたときに、いわゆる政治学の言葉で言うと、ナラティブになるのかなど。例えば情報通信関係で SNS をいま見ていたとしても合意ができないというか。こういった政治のデータを出すのはいささか不適切かもしれないが、国民国家の民主主義の根本的な原理である選挙でその根本が揺らいできてるように感じる。一つの大きな物語があった方がいいとは断言できないが、人々をまとめたり、いわゆる統治の技術で、大きな視点から言うと、今までの役割を果たしてきたフィクション、ナラティブ、物語というのが本来各々違ったものを持っている、というのが現状なのかなと思った。

・おっしゃる通りで、いわゆる国家を支えていたのはメディアだというのがアンダーソンの言い方である。あれは一方向だったからであつたからで、新聞やテレビやラジオはきっちりエビデンスベースで正確な情報を流しているとみんなが信じていた。しかも視聴者は自分でニュースを流すことにいかなかった。でも、SNS の時代になってフェイクニュースが飛び立って、何が真実かってことが、誰も保証できなくなった。信頼というものが何をベースに起こるものかということが揺らいでしまい、逆説的だが、それでも残っているのは宗教なのではないか。

・宗教にはもともとエビデンスがない。キリスト教にしてもキリストの逸話が残っているだけで神がいることなどわからず、仏教もそう。科学的に何も根拠はないにも関わらず人々は信じている。これは言葉が作っている現象であるにも関わらず、言葉を超える現象である。政治はエビデンスが必要で、だから三権分立で行政府と立法府が分かれて、何が真実かと議論するチャンスがあるが、宗には全くそれはない。にも変わらず人々がそれに基づいて道徳を考え、倫理を考えている。この分かち合いの研究会のどこかにこうした問題を考える場があってもいいかなと思う。伊谷さんが言い当てててと思っているが、それはやっぱり人間以外の動物から来た社会的な遺産を、人間はある方向にねじ曲げながらも使っていることは確かである。他の道があったはずだが、それを一体我々はどう作ってしまったのか、もう少し深いところまで降りていって話し合う必要があるのかなと思う。

●「分け合い」から「分かち合い」、分けられないものを「分かちあう」、分けられるものをあえて分けない

・「分け合い」から「分かち合い」という話にもどるが、分けられるものを中心にし、サルや類人猿は共存している。でも、分け合えないもの、例えば遊びがそうで、遊びとは文脈を作っていく作業で、これはどちらかが欠けても社会的な遊びは成り立たない。それは分けられないものを分かち合おうという精神によって作られる。逆に言えば、もう一つ、分けられるものをあえて分けないということをどう考えるか。それを分かち合うも

のに変換してしまうということがあるのか。分け合いと分かち合いのはっきりしたものを一方向では曖昧にする方向にいくのと、それから本来なら分けられないものを分かち合うという社会的な共同作業を増やしていく。それが「弱みを強みに変える」戦略と言い換えたものなのだが、実はそれは言葉というのが分かち合いの中にあるようでいて切るものだと、言葉って論理であるから。その分けていくものの中で落とされていくものを拾い上げていったものが芸術だと思う。音楽は分けない。絵も素像も言葉の論理で分けられなかったものを、一方で作っていったのが芸術的な衝動であって、それは言葉とともに現れたと思う。だが、その芽はもっと前からあった。面白いのは、言葉は分けるのだが、言葉によってフィクションがつながる。分けて組み合わせ、新たなものを作る。

・言葉の最初の機能は比喻だと思う。最初に出てきた芸術性のあるものってビーナス像とかで、あれもいろいろ解釈あるが、こんなおっぱい大きくておしりが大きくて安全だとか、祈ったんだろうと言われてるが、あれは比喻である。あるいはライオンマンのように人間の体をしているが、顔だけライオンっていう、あれも比喻であろう。だからアナロジーは言葉の持つ大きな特徴じゃないかと思う。

・アナロジー。メタファーじゃなくて？

→メタファーも入るかもしれない。実際に物に移し替えてみればメタファーになるが、アナロジーの段階では対象させるだけで、さっき憑依と言ったのがそこで、憑依はまだ頭の中でだけでできる。

・「逃げられない」というのはすごく面白い。「寄り添う」とか「理解しちゃう」とか、本当に人を理解し合うことってできないはずだが、理解し合おうとするから心がどこかに行って、どこかの遠くの人と理解し合ったというふうになるという感じがするのだが、「分かち合う」ときに例えば心を分かち合うときに遠くの他者と情報で分かち合うっていうのが一つのあり方だと思うが、もともと私たちは同じ土地に住んでいても分かり合えない。他者と分かり合えないけども、一緒にいる。そこで折り合いをつけるというのが「分かち合い」になってきたことだろうと思うが、その中で理解し合おうとするという努力はあったと思う。理解し合うというのが理念化されすぎて抽象化されすぎたのかもしれない。

●互酬的利他主義

・互酬的利他主義は個人単位であって、今自分が損だなと思ってもお返しがあるから、その損を引き受ける相手のために何かしてやる。非常に西洋的な発想で、「分かち合う」思想ではない。でも、利他的な行動がなぜ起こるのかを説明しようとしている。互酬性が認められるからグルーミングやアライアンスに当てはめて語っていた。あれはやはり「分かち合い」じゃないのではないかと思う。

- ・グルーミングは分かち合いだと思う、利他行動のやりとりではなく。
- ・この研究会は「分かちあい」という日本語で研究会を作ってしまう面白い例だが、私が英語にしたらレシプロカル・アルトリズムになってしまう。シェアリングって言った時のシェアリングっていう単語の意味合いもその点ずっと曖昧で、シェアリングというのは「分け合い」にも「分かちあい」にもどちらにでも取れる。確かに環境をシェアするというか、エクスペリエンスをシェアするっていうのは、「分かち合い」っぽいけど、単語としては同じである。
- ・「シェア」って言葉を使って「分け合う」と「分かち合う」と「共有する」でもいいが、両方が入るんだらうなということを（この研究会でも）以前に確認した。
- ・一つ大事なことがあると思っていて、「分け合い」と言った場合には必ず主体がいる。「分かち合い」と言ったときには、述語的な表現でもあるので、主体が見えなくてもいい。何かぼんやりとした雰囲気があれば分かってしまう。そこに名前のついた誰かがいなくてもいいという、これはすごく日本語的な表現である。西田幾多郎の言葉を借りれば、日本語の持っている述語的な表現で主体が重要なのではなくて客体が重要だという話である。主体がない客体がないというか、お互いがお互いの客体になっちゃう場合がある。近代的な個人というのが出てきて、我々はその個人というものに縛られていろんな言葉を解釈しているというところで「分かちあう」というのが出てくるのだが、本当に個人というのは存在するのかなというようなことを思いながら「分かちあい」というのを見ていかなきゃいけないと思う。
- ・最近シェアリングエコノミーという言葉が流行っていて、カーシェアとかシェアハウスとか物件のシェアとかあるが、あれは、結局、人が使わない間に誰かに使ってもらって利益を交換していくようなものだと思うが、それを考えるとやはり「分け合い」であって、「分かち合い」じゃないなと気づく。私が見ているのは（狩猟採集民の）食べ物の分け合いであり、分かち合いでもあって、食べ物の物質だけを分け合っているだけじゃないのだ、同じシェアと言ってしまうと両方入ってしまうけど、分け合いと分かち合いという風に考えると、何が分けさせられているのか、が違うなと思った。今、全国で子ども食堂、親子食堂の福祉保健所があるが、あれは利益を求めるのではなくて、食材を持ち寄って、あるいは金を寄付してくれる人としてみんなで作って食べましょうという話です。これは分け合いよりも分かち合いに近いのかなという感じがする。本来なら片親しかいないとか、子どもが一人ぼっちで食べるころだが、今は家族も来ているし、子どもはいないけどおじいちゃんおばあちゃんが来るとか、結構ある。それを通して地域に参加したり、行事に出てみないとか言われたり、ネットワークが広がるということにも広がる。